

[D年] 公現後第2主日(2024年1月14日)

【旧約聖書日課】サムエル記上 3章1～10節

1少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった。2ある日、エリは自分の部屋で床に就いていた。彼は目がかすんできて、見えなくなっていた。3まだ神のともし火は消えておらず、サムエルは神の箱が安置された主の神殿に寝ていた。4主はサムエルを呼ばれた。サムエルは、「ここにいます」と答えて、5エリのもとに走って行き、「お呼びになったので参りました」と言った。しかし、エリが、「わたしは呼んでいない。戻っておやすみ」と言ったので、サムエルは戻って寝た。

6主は再びサムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、「わたしは呼んでいない。わが子よ、戻っておやすみ」と言った。7サムエルはまだ主を知らなかったし、主の言葉はまだ彼に示されていなかった。8主は三度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、9サムエルに言った。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい。」サムエルは戻って元の場所に寝た。

10主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。「サムエルよ。」サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております。」

【使徒書日課】

ガラテヤの信徒への手紙 1章11～24節

11兄弟たち、あなたがたにはっきり言います。わたしは告げ知らせた福音は、人によるものではありません。12わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。13あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。14また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。15しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、16御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、17また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。18それから三年後、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、19ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会い

ました。20わたしがこのように書いていることは、神の御前で断言しますが、うそをついているわけではありません。21その後、わたしはシリアおよびキリキアの地方へ行きました。22キリストに結ばれているユダヤの諸教会の人々とは、顔見知りではありませんでした。23ただ彼らは、「かつて我々を迫害した者が、あの当時滅ぼそうとしていた信仰を、今は福音として告げ知らせている」と聞いて、24わたしのことで神をほめたたえておりました。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 1章35～51節

35その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。36そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。37二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。38イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」と言うと、39イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。40ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうち一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。41彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言った。42そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。

43その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って、「わたしに従いなさい」と言われた。44フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダの出身であった。45フィリポはナタナエルに出会って言った。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」46するとナタナエルが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは、「来て、見なさい」と言った。47イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない。」48ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」と言われた。49ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」50イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見ることになる。」51更に言われた。「はっきり言っておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見るようになる。」

『聖書協会共同訳』（2018年版）読み比べ

サムエル記上3章1～10節

¹少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。当時、主の言葉が臨むことはまれで、幻が示されることもなかった。²ある日、エリは自分の部屋で床に就いていた。彼は目がかすみ、見えなくなっていた。³神の灯はまだ消えておらず、サムエルは神の箱が安置された主の宮で寝ていた。⁴主がサムエルを呼ぶと、サムエルは、「ここにいます」と言って、⁵エリのもとに走って行き、「お呼びになったので参りました」と言った。しかしエリは、「私は呼んではいない。戻って休みなさい」と言ったので、サムエルは戻って休んだ。

⁶主は再びサムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、「私は呼んではいない。わが子よ、戻って休みなさい」と言った。⁷サムエルはまだ主を知らず、主の言葉はまだ彼に示されていなかった。⁸主は三度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、⁹サムエルに言った。「戻って休みなさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい。」サムエルは戻って、元の場所で寝た。

¹⁰主が来られ、そばに立って、これまでと同じように呼ばれた。「サムエル、サムエル。」サムエルは答えた。「お話しください。僕は聞いております。」

ガラテヤの信徒への手紙1章11～24節

¹¹きょうだいたち、どうか知っておいてほしい。私が告げ知らせた福音は人によるものではありません。¹²なぜならこの私は、その福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、実にイエス・キリストの啓示を通して受けたからです。¹³私がかつてユダヤ教徒としてどのように振る舞っていたかは、あなたがたが聞いておられます。私は神の教会を徹底的に迫害し、破壊しようとしていました。¹⁴同世代の多くの同胞よりもユダヤ教に精進し、先祖の伝承に対しては極めて熱心でした。¹⁵⁻¹⁶しかし、母の胎にいるときから私を選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子を私に示して、異邦人に御子を告げ知らせるようにされたとき、私は、人に相談するようなことはせず、¹⁷また、私よりも先に使徒となった人たちがいるエルサレムへ上ることもせず、直ちにアラビアに出て行き、そこから再びダマスコに戻ったのです。¹⁸それから三年後に、エルサレムによってケファを訪ね、彼のところに十五日間滞在しました。¹⁹しかし、主の兄弟ヤコブを除き、ほかの使徒には誰にも会いませんでした。²⁰神の前で断言しますが、私があなたがたに書いていることに偽りはあり

ません。²¹その後、私はシリアおよびキリキアの地方に行きました。²²キリストにあるユダヤの諸教会には、顔が知られていませんでした。²³ただ彼らは、「かつて我々を迫害した者が、当時は滅ぼそうとしていた信仰を、今は告げ知らせている」と聞いて、²⁴私のことで神を崇めていました。

ヨハネによる福音書1章35～51節

³⁵その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と共に立っていた。³⁶イエスが歩いておられるのに目を留めて言った。「見よ、神の小羊だ。」³⁷二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。³⁸イエスは振り返り、二人が従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」と言うと、³⁹イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らは付いて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。⁴⁰ヨハネから聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。⁴¹彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「私たちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言った。⁴²そして、シモンをイエスのもとに連れて行った。イエスは彼に目を留めて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。

⁴³その翌日、イエスは、ガリラヤへ行くとしたときに、フィリポに出会って、「私に従いなさい」と言われた。⁴⁴フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダの出身であった。⁴⁵フィリポはナタナエルに出会って言った。「私たちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。ナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」⁴⁶ナタナエルが、「ナザレから何の良いものが出ようか」と言うと、フィリポは、「来て、見なさい」と言った。⁴⁷イエスは、ナタナエルがご自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」⁴⁸ナタナエルが、「どうして私を知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「私は、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下のいるのを見た」と言われた。⁴⁹ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」⁵⁰イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下のあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。それよりも、もっと大きなことをあなたは見るであろう。」⁵¹さらに言われた。「よくよく言っておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・1月14日「公現後第2主日」の日課主題は「最初の弟子たち」。

・旧約聖書日課は、「サムエル記上」から、預言者サムエルの少年時代の召命逸話を伝える箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、パウロが自分の福音宣教の正統性を訴えるために自伝的叙述を重ねる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、主イエスに従った最初の弟子たちの召命を伝える箇所。

旧約日課(サムエル上3章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第三に置かれた歴史物語文書。便宜上、上下巻に分けて扱われているが、元来は一卷本の書物として編集されたものと考えられている。正典「前の預言者」は、カナン定住時代のイスラエルの「正史」物語を展開しているが、本書は、その中でイスラエルおよびユダの王国建国物語として構成され、イスラエルの王サウルおよびユダとイスラエルの王ダビデの時代を扱う。この文書が「サムエル記」と呼ばれるのは、両王の王権樹立に大きな影響力を行使したシロ神殿祭司サムエルを中心に物語が構成されるため。このような構成によって、王国物語の展開にもかかわらず、国王よりも上位の権威者として祭司・預言者の存在があることを、本書は主張しようとしていると考えられる。日課箇所は、このサムエルが少年時代に経験した召命の出来事を物語る。

・サムエルは、不妊に悩んだ母ハンナの誓約に基づいて、誕生した後、乳離れすると幼時にシロ神殿の祭司エリに預けられた(サム上 1~2 章)。シロ神殿は、モーセの後継者ヨシュアがイスラエルの民をカナンに定住させた折、共同体全体を招集して「臨在の幕屋」を立てたことから始まる(ヨシュア 18:1)。「臨在の幕屋」は、モーセがエジプトから民を導き出した後、シナイ山で「律法授与」されるのに合わせて設けられた移動式礼拝所で、「掟の板」の収められた「神の箱」が神の臨在を象徴するものとされていたと考えられる(出 33:7~11、また同 25 章以下)。シロの礼拝所は「主の神殿」(サム上 1:9、同 3:3 など)と呼ばれるが、この「神殿(ヘイカル)」は、「外陣」(王上 6:17 など)あるいは「宮殿」(王上 21:1 など)とも訳される語。旧約文書で広く「神殿」の意で用いられるのは、「家」を意味するヘブライ語「バイト」。サムエルの出身部族であるエフライム族の領域には、その名も「ベテル(←ベト・エル=神の家)」という聖地や「シケム」という聖地が古くから知られているが、「臨在の幕屋」の地として「シロ」が選ばれたのは、「ベテル」や「シケム」とは異なる祭司伝統の集団に担われていたということかもしれない。このような聖所の祭司団を構成する集団は「レビ人」と呼ばれたが、サムエルの出自は「レビ人」ではない。

・「レビ人」は、世襲により祭司職を輩出する身分にある一族を指す呼称とされるが、「レビ人」以外から祭司職を担う者が立てられることがなかったわけではない。そもそも宗教的営為は、家父長的伝統を継承する部族集団の存立と結びついており、小規模な部族集団では家長(部族長)が主たる祭司職を担うのが通例である。ところが、部族集団が一定規模以上に拡大すると、権力の分業が進み、宗教的権威に特化した権力集団が起こったと考えられる。これが完全に「身分」として特化すれば「レビ人」のような存在になるが、実際には、家父長的集団の伝統から、各家から「長子」などが祭司職に就くという制度を取って来た例も知られる。サムエルが、母ハンナの誓約によるとはいえ、長子でありながら幼時に神殿に託されたのは、そのような「レビ人=祭司」制度が未分の状態の中で行われていたことの反映とも考えられるだろう。

・エフライム族出身のサムエルが、「祭司」の権威を与えられ、後にイスラエル諸部族を糾合させてベニヤミン族出身のサウルを王と戴く王国建設の立役者になったと、本書物語は展開していく。ところが、本書をはじめとする正典を編纂したのは、前6世紀以降の旧ユダ王国(南王国)支配層の末裔であり、彼らは、祭司職の正統性についてのこだわりを持っていた。ユダ王国の創始者ダビデ王や続くソロモン王は、実際には王立神殿の主宰者(大祭司!)の実態を有していたと考えられるが、にもかかわらず、王国末期以降、彼らは祭司職の身分的正統性を重視した。そこでサムエルに問われたのは、彼が、出自に関わらず神からの直接的な召命によってその職に任じられた「預言者」であるという解釈だったのだろう。日課箇所の召命物語は、そのような視点から見ることができる。

使徒書日課(ガラテヤ1章)

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第四に置かれた書簡文書。パウロがシリア・アンティオキアの教会から派遣された「バルナバ宣教団」に加わっていたときに開拓された「ガラテヤ地方」の諸教会に宛てて記されている。おそらく、パウロが「バルナバ宣教団」を離れて独自の宣教団を組織し、マケドニア伝道などに取り組むようになった時期以降に記された。その時期、パウロは、自身の福音理解を先鋭化し、バルナバらが依拠する中心的な使徒らの方針に異を唱え、教会の「非ユダヤ化」を徹底しようと考えていた。その考えは後に修正され、使徒らの方針と協調的な立場に変化するのであるが、本書簡では、いまだ自らの主張の正当性を訴えることに必死になっていると考えられる。日課箇所では、パウロは、福音宣教者としての自身が、使徒の権威に拠らず神からの直接的な権威付与によると主張し、しかも、おもだった使徒たちからそのことを承認されたのだと訴えている。その際にパウロは、旧約預言者の召命逸話を典拠として、自身の宣教者としての正当性を訴えようとしている。

・12 節「啓示」は、ギリシア語「アポカリュプシス」で、「パウロ書簡集」で特異的に用いられる用語(新約 18 例中 13 例。ほかは、ルカ 1 例、I ペトロ 3 例、黙示録 1 例)。この語の語義は、隠れていたものが「現臨すること／現れること」。多くの用例が「イエス・キリストの現れ」という用法で知られ、いわゆる神学概念の「啓示」とは必ずしも一致しない。主流プロテスタント神学において、「啓示」は、「聖書」とほぼ同義で扱われ、「言葉」以外の「啓示」を否定的に扱う傾向にあるが、パウロがそのような意図で「啓示」の語を用いていたと断ずる根拠はない。おそらく、より広がりを持った意味で「イエス・キリストの現れ」としての「啓示」を考えていたと推認される。

福音書日課(ヨハネ 1 章より)

・日課箇所は、本福音書が伝える主イエスの主要な弟子たちの召命逸話。共観福音書が四人の漁師(シモンとアンデレ、ヤコブとヨハネ)の召命から物語るのに対して、ヨハネ福音書は、二人の「洗礼者ヨハネの弟子」がヨハネの指示によって主イエスに従うようになった逸話から語り始める。この二人のうち一人は「アンデレ」と明示されているが、もう一人は明示されない。おそらく、四人の漁師のうち一人である「ヨハネ」を指していると考えられる。共観福音書で「一番弟子」と位置づけられている「シモン・ペトロ」は、弟アンデレの誘いによって従うようになったとされ、「ヨハネ」の兄「ヤコブ」のことは触れられもしない。ヨハネ福音書がこの「ヨハネ」を中心として形成された教会共同体によって編み出されてきたものであるという教会伝承が正しいければ、本福音書は、「ヨハネ」の視点から、「共観福音書」の伝える「ペトロ」や「ヤコブ」を核とした主イエスと弟子たちとの関係性に異を唱え、「ヨハネ」(と「アンデレ」)だけが知る事情をここに提示しようとしている、ということかもしれない。

・日課箇所には、「見る／分かる／見つめる」と訳される語(オラオオ／エイドオ／エムブレポオ)が多用されている。「オラオオ」(39 節、50 節、51 節。また 18 節、34 節も)。「エイドオ」(39 節、46 節、47 節、48 節、50 節。また 33 節も)。「エムブレポオ」(36 節、42 節)。また、「出会う」と訳される語(エウリスコオ)も多用される(41 節、43 節、45 節)。これらの語は一般的な用語で、どの福音書でも用例があるが、特にヨハネ福音書では多用される傾向にある。これらの語は、視覚的あるいは物理的な側面が考えられているのはもちろん、知的あるいは人格的な理解を意味して用いられることもある。ヨハネ福音書は、弟子たちのイエス理解において、視覚や物理的な近さに基づいた認知と、知的あるいは人格的な意味での概念的な理解を、分けて考えず、連続した事柄として把握しようとしていると考えられる。本福音書末尾の「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(20:29)も、見ることの意義を否定していると解するのは誤り。

来週の誕生日 (1 月 14 日～20 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-287 番「ナザレの村里」(= I 272「ナザレのふせやに」)は、19 世紀英国教会司祭ガーニーの歌詞を自由に翻案してものが『讃美歌』(1931 年版)に採用され歌われてきたが、『讃美歌 21』では大幅に歌詞を改訂している。曲は、18 世紀ロシアの教会音楽家ボルトニャンスキーの作曲だが、ロシア正教会の讃美歌ではない。
- ・21-189 番「ちいさいこどもの」は、教団の牧師・北村宗次がサムエル記上 3:1~10 に基づいて作詞。北村は、長年にわたり教団讃美歌委員の中心メンバーとして『讃美歌 21』や『こどもさんびか改訂版』の編纂に携わった。作曲は、トロンボーン奏者の山元富雄。
- ・21-509 番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966 年夏の異常な猛暑の中で着想された。

21-287「ナザレの村里」

We saw Thee not when Thou didst come

1. We saw thee not when thou didst come / To this poor world of sin and death; / Nor yet beheld thy cottage home, / In that despised Nazareth; / But we believe thy footsteps trod / Its streets and plains, thou Son of God; / But we believe thy footsteps trod / Its streets and plains, thou Son of God.
2. We saw thee not when lifted high / Amid that wild and savage crew; / Nor heard we that imploring cry, / "Forgive, they know not what they do!" / But we believe the deed was done, / That shook the earth and veiled the sun; / But we believe the deed was done, / That shook the earth and veiled the sun.
3. We gazed not in the open tomb / Where once thy mangled body lay; / Nor saw thee in that "upper room," / Nor met thee on the open way; / But we believe that angels said, / "Why seek the living with the dead?" / But we believe that angels said, / "Why seek the living with the dead?"
4. We walked not with the chosen few / Who saw thee from the earth ascend; / Who raised to heaven their wondering view, / Then low to earth all prostrate bend; / But we believe that human eyes / Beheld that journey to the skies; / But we believe that human eyes / Beheld that journey to the skies.

21-502「光のある間に」

Walk in the light: so shalt thou know

1. Walk in the light: so shalt thou know / That fellowship of love / His Spirit only can bestow / Who reigns in light above.
2. Walk in the light: and thou shalt find / Thy heart made truly his / Who dwells in cloudless light enshrined, / In whom no darkness is.
3. Walk in the light: and thou shalt own / Thy darkness passed away, / Because that light hath on thee shone / In which is perfect day.
4. Walk in the light: and thine shall be / A path, though thorny, bright; / For God, by grace, shall dwell in thee, / And God himself is light.